

## 研究報告掲載報文要旨

### 京都府沖合におけるヤナギムシガレイ着底期稚魚の分布水深

野口俊輔, 宮嶋俊明, 岩尾敦志

京都府沖合におけるヤナギムシガレイ着底期稚魚の分布水深を明らかにするため, 2014～2015年の4～7月に水深110～190 mにおいて桁曳網を用いて着底期稚魚の採集を試みた。また, 稚魚の分布する底層の環境条件を把握するため, 水温, 塩分, 底質の粒度組成およびベントスを調べた。着底期稚魚のほとんどが, 水深150 mで採集されたことから, 同水深は稚魚にとって重要な成育場であると示唆された。環境調査では, 水深150 mに特異的な要因は見られず, 稚魚の分布には水温や餌料生物などの要因が複合的に影響しているのではないかと考えられた。

### アカモク養殖における種苗沖出し水深, 時期および固定間隔の成長, 生残および生産量への影響

西垣友和, 篠原義昭, 道家章生

宮津市大島地先においてアカモク人工種苗を用いた養殖試験を実施し, 種苗の沖出し水深, 時期および固定間隔が成長や生残および生産量に与える影響を調査した。水深3 mに沖出した場合に比べ, 水深1 mに沖出し, 後に水深3 mに下げた場合に生残率が高く, 生産量が多かった。種苗の生残率は10月下旬沖出しでは高く推移したが, 9月中旬沖出しでは40%まで低下した。固定間隔10 cm区と20 cm区の生産量は17 kg m<sup>-1</sup>と同程度であったが, 30 cm区では他の区の50%に減少した。これらの結果から, 10月下旬に水深1 mに20 cm間隔で種苗を沖出し, 12月に水深3 mに下げることによって2月上旬に高生産量が得られることが明らかとなった。

### ELISA法を用いたトリガイ軟体部毒量とマウス毒力との関係

尾崎 仁, 中西雅幸

2012年5～8月に, 宮津湾のトリガイ22検体を用いて, 麻痺性貝毒のELISA法(Skit ELISA for PSP)による毒量とマウス試験(公定法)による毒力との関係を調べた。両法による測定値には正の相関が認められた。公定法規制値である4MU/gに相当するELISA毒量の最小値は4.6 nmol/gと推定された。また, 「二枚貝等の貝毒のリスク管理に関するガイドライン」に基づくスクリーニング指標値2 MU/gに相当するELISA毒量は2.5 nmol/gと推定された。

### アカモク冷蔵幼胚の発芽率に及ぼす保存密度および保存後の温度馴致の影響(短報)

西垣友和, 道家章生

アカモク冷蔵幼胚を用いた種苗生産技術を開発するために, 冷蔵保存時の幼胚の密度および冷蔵保存後の温度馴致が幼胚の発芽率に及ぼす影響を調査した。1万個L<sup>-1</sup>の密度で冷蔵保存した幼胚は, 2ヶ月後でも概ね高い発芽率を維持したが, 10万個L<sup>-1</sup>以上の密度では一週間後に発芽能が失われたことから, 保存密度としては1万個L<sup>-1</sup>が適当であると考えられた。また, 冷蔵保存後に20℃および25℃で培養した場合, 馴致の有無や培養温度の違いによる発芽率の差は認められず, 馴致は不要であることがわかった。